洞爺湖有珠山 ジオパーク推薦

地域活性化へ弾み

「サミット後の目玉」

地元・専門家、歓迎の声

「洞爺湖有珠山地域」が、日本初の世界ジオパークへの登録に向け、国内推薦地域に選定された二十日、地元からは知名度向上や観光振興を期待する声が上がった。二〇〇〇年噴火以降、観光客誘致に苦労してきた同地域は、七月の北海道洞爺湖サミット開催に続く新たな看板が加わることで、地域活性化に弾みがつきそうだ。（徳永仁、増田智明）

「新しい観光を進める上で画期的な出来事だ」。壮瞥町で有珠山ロープウェイを運行する「ワカサリゾート」の若狭幸司常務は興奮気味に話した。

これまでは温泉に依存してきた観光地だったが、「火山や地質など違った側面の魅力を売り出せる。学びの場としてもPRでき、修学旅行生を取り戻すきっかけにもなる」と力を込める。

洞爺湖町洞爺湖温泉の北海ホテルの篠原功社長も「サミット後の観光の目玉になる」と期待は大きい。

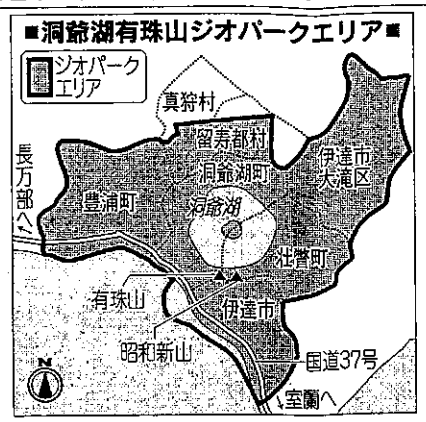
今秋創設され、地域の防災リーダーとなる「洞爺湖有珠火山マイスター」になった伊達市の安藤忍さんは「有珠山を中心とした地域の財産を多くの人に知ってもらいたい」と話す。

専門家の評価も高く、火山学者の岡田弘・北大名誉教授は「有珠山は二十世紀に四回噴火したが、人との共生を果たしている。この地域の特別な魅力を世界の人々に知ってもらう絶好の機会になる」と喜ぶ。

北大観光学高等研究センターの石森秀三センター長は「登録されれば、世界の共通財産になり、地域にとっては誇りだが、自然を維持管理していき、ジオパークを育てていく地元の責任も大きい」と強調する。

四市町がまたがるエリアだけに自治体間の連携は欠かせない。伊達市の菊谷秀吉市長は「地域振興のためジオパークの推進に協力したい」と話し、洞爺湖町の長崎良夫町長は「自治体間で行政のほかに地域住民、民間団体などの連携も重要」と指摘する。

■洞爺湖有珠山ジオパークエリア■



人づくりや事業費確保

周知や普及 課題も

「洞爺湖有珠山地域」が世界ジオパークの国内推薦地域に選定されたことで、観光振興にも弾みが付くことに関係者の期待が高まるが、周知や普及には質の高いガイドの養成が急務など課題も多い。周辺自治体の広域的な連携は不可欠だが、微妙な温度差もある。（田村晋一郎、升田一憲）

ジオパークは保全を重視する世界遺産と違い、観光や教育などで地域を積極的に活用することを求めている。世界自然遺産に登録された知床では、立ち入り制限区域などで関係者が調整作業に苦労した。その点、「新たに規制が加わらないのは大きな強み」と指摘する関係者は多い。

胆振管内への観光客の入り込み数は二〇〇〇年の有珠山噴火前までは年間千八百万―千九百万人だったが、一時、千三百三十四万人に減少。その後増加傾向に転じたが、噴火前の水準に戻っていない。火山との共生という特殊な地域に、修学旅行生の増加が期待される。ある旅行会社の担当者は「知名度の上昇は観光の追い風。地域の取り組みを注目する」と歓迎する。

ジオパークでは、ガイド付きツアーが欠かせない。有珠山周辺の地形の成り立ちに加え、地層や岩石などの専門知識が必要だからだ。

胆振支庁は有珠山噴火の経験や減災の知恵を後生に伝えるため、「洞爺湖有珠火山マイスター」を十月に創設し、一期生六人を選定した。胆振支庁は「マイスター制度を発展させて、今後も担い手を増やす」と前向きだ。

しかし、ボランティアに参加する世代は大半が五十、六十代。若い世代をどう取り込むかが問われている。

資金面も課題だ。推薦地域に選定されても「金銭的な援助が出るわけではない」（関係者）。壮瞥町の木村尚司エコミュージアム推進室長は「もっと民間企業に加わってもらい、官民挙げて盛り上げていく必要がある」と強調する。

胆振西部の伊達、壮瞥、洞爺湖、豊浦の一市三町は二〇〇六年十一月、観光など地域経済の活性化に生かそうと、「洞爺湖周辺地域エコミュージアム推進協議会」を設置した。周辺を自然の博物館に見立て、噴火跡を見る散策路の整備なども進めている。

ジオパークはエコミュージアムの考え方と似ているため、壮瞥町は積極的な推進姿勢に転換した。同町は二〇〇七年八月の環境フォーラムで、ジオパーク構想を表明。しかし、他市町に事前説明がなく、突出した行動と受け止められた。「根回しが不十分だ」と不満の声が漏れたほどだ。

観光を前面に出す洞爺湖町側は「防災が強調されると、観光客に不安をあおる」との指摘もあり、壮瞥町とは微妙な温度差がある。

ジオパーク科学検討委員会のある委員は「行政の境目は今後、何も意味を持たない」と、一致協力体制の構築を求めている。

有珠山の銀沼火口から小有珠山頂部へと上る伊達市の有珠山現地勉強会の参加者。観光客の増加が期待される＝2007年10月

宇井忠英・北大名誉教授に聞く

保護と活用 共に大切

「洞爺湖有珠山地域」がジオパーク登録に向け、国内推薦地域に選ばれた意義などについて、洞爺湖有珠山ジオパーク科学検討委員の宇井忠英北大名誉教授に話しを聞いた。（聞き手・田村晋一郎）

――国内推薦地域に認定されたことをどう思いますか。

「国際的にジオパークに認定された所は五十地域くらいありますが、火山地域で認定された例は少ないです。日本の景観で、国際的に誇れるのは火山地域です。洞爺湖有珠山地域が認定されたのは大変良いことです」

――世界自然遺産とはどう違うのですか。

「世界自然遺産はきちんと保護するのが重要です。ジオパークは、保護しながらも人々がそれをどう活用していくかが大切です」

――洞爺湖有珠山地域の魅力は？

「洞爺湖有珠山地域は二十世紀に四回も噴火し、人々の記憶のある間に次の噴火が来て、しかも噴火ごとに地形が変わってます。それから噴火後に自然が回復してくる様子がよくわかります」

――観光への影響はどうでしょう。

「ジオパークは自然を学びに来る場所として伸びていってほしい。サミットを契機に、フットパスがいくつか造られました。熟年世代が個人旅行でゆっくり見て回る、長期滞在型観光の時代になってきたので、うまくマッチしますね」

――それには何が必要でしょう。

「看板とか、ガイドブックなどです。それらがないと、世界的に価値のあるジオパークとして誇れません」

――今後は。

「従来は国や道が何か作ってくれる形が多かったが、もっと自主的に地元の方が手を挙げて活躍する場をつくってほしい。海外を見ても、けっして国とか行政機関だけが前面にでたりしません よ」

●ジオパーク登録までのこれまでと今後の流れ

2000年3月　23年ぶりに有珠山噴火
6月　北海道活性化懇談会（道開発庁＝当時＝長官の私的諮問機関）が火山資源を活用した新たな観光施設として、洞爺湖周辺地域一帯を自然博物館に見立てるエコミュージアムにするよう提言
01年9月　胆振西部の観光や産業振興に取り組んでいた洞爺湖周辺の6市町村（当時）による「レイクトピア21推進協議会」がエコミュージアム構想策定部会を設置
02年6月　同協議会が有珠山や洞爺湖周辺の自然、噴火遺構、歴史・文化遺産の3エリアを主な見どころにした「洞爺湖周辺地域エコミュージアム構想」を策定
10月　同協議会がエコミュージアムを通じて、新しい洞爺湖圏域を創造することなどをうたった「エコミュージアム宣言」を採択
03年3月　看板設置や散策路整備、シンポジウム開催などをまとめた実施計画策定
04年4月　計画に基づき整備事業などを開始
6月　国連教育科学文化機関（ユネスコ）の支援で「世界ジオパークネットワーク」（パリ）設立
06年11月　伊達市、洞爺湖、壮瞥、豊浦町による「洞爺湖周辺地域エコミュージアム推進協議会」（会長・山中漠壮瞥町長）発足
07年12月　新潟県糸魚川市や壮瞥町などジオパーク登録を目指す国内候補地でつくる「日本ジオパークネットワーク連絡協議会」発足
08年5月　登録の申請窓口となる「日本ジオパーク委員会」設立
6月　エコミュージアム推進協議会に「洞爺湖有珠山ジオパーク科学検討委員会」を設置
6月　同協議会がドイツで開かれた「第3回ジオパーク国際ユネスコ会議」へ参加。登録に向けて、洞爺湖有珠山地域を大会で紹介し、PR
7月　サミット後の観光振興策の目玉として、環境省や地元自治体などが洞爺湖周辺地域でフットパスコース（散策路）を整備
7月　北海道洞爺湖サミット開催
7月　登録に向け、国内候補地を推薦する「日本ジオパーク委員会」に審査申請書を提出。洞爺湖有珠山地域のほかに、長崎県の雲仙岳など計五地域が申請
9月　同委員会で5地域によるプレゼンテーション
9月　同委員会による現地審査
10月20日　ジオパーク登録の日本国内推薦地域として「洞爺湖有珠山ジオパーク」など3地域が決定
12月ごろ　3地域の登録申請書類を世界ジオパークネットワークに提出
09年6月以降　世界ジオパークネットワーク事務局会議で書類審査した後、現地審査を経て、登録決定へ

むろらん胆振

MURORAN・IBURI

登録意義とはきょう講演会

壮瞥・洞爺湖町で

【壮瞥、洞爺湖】「洞爺湖有珠山地域」が世界ジオパーク（地質遺産）の国内推薦地域に選定されたことを受け、日本ジオパーク委員会の審査結果の報告会と、登録の意義を訴える講演会が二十一日、壮瞥町と洞爺湖町でそれぞれ行われる。報告会は道の駅「そうべつ情報館i」で、午後二時から。

講演会は洞爺湖ビジターセンターで午後六時から。岡田弘・北大名誉教授、大島直行・伊達市噴火湾文化研究所長ら三氏が「ジオパークに期待するもの」と題し話す。

いずれも洞爺湖周辺地域エコミュージアム推進協議会主催。入場無料。問い合わせは協議会事務局☎0142・66・4200へ